

フランス語で 緊張のスピーチ



すぎた
杉田 水脈

フランス語のスピーチをひたすら練習

ジュネーブで開かれる国連の女子差別撤廃委員会の「準備会合（プレセッション）」に参加するため、2015年7月25日の深夜、単身、関西国際空港から飛び立ちました。エミレーツ航空、ドバイ経由、十数時間かけての長旅です。

プレセッションで与えていただいた時間はわずか2分！今回は英語ではなくフランス語でスピーチをすることにしました。（二月から始めたフランス語がこんなところで役に立つとは。）

このほかにも現地の方が開いてくださる講演会やシンポジウムでも10分ずつ英語でスピーチをする機会をいただいております。「日本の真実を世界に発信していきたい」という思いで準備に取り組みしました。

フランス語の先生とともに辞書を引きながら原稿を書き上げました。「慰安婦」「強制連行」など、普通の会話ではなかなか出てこない内容だったため、思いのほか苦労しました。出来上がった原稿を先生に読んでいただき、それをiPhoneに録音し、飛行機の中でずっと聞いていました。ジュネーブに到着したのは26日のお昼前。自力で空港からホテルへ移動し、チェックインを済ませました。その日の15時、現地でお世話をしてくださる有村さくらさんという女性とお会いすることになっていました。有村さんはジュネーブ在住で、フランス語、英語共に堪能な才女です。私の用意してきた原稿を見て、「より、現地の外国人に伝わるような表現に変えましょう」と、おっしゃいました。もう一度、一から原稿を練り直すこととなったのです。

原稿を書き上げ、ホテルでプリントアウトしていただき、委員への配布用の原稿（20部）も印刷していただきました。（フロントの方がとても良い方で、すべて無料でしてくださいました。）できた原稿をもとに今度は発音の練習です。飛行機で聴き込んだ内容が変わってしまったので、引き続き有村さんにご指導いただきながら、頑張りました。

打ち合わせは15時から始まり、あつという間に21時になっていました。とても熱心にご指導

くださった有村さんにお礼を言って、別れました。ジュネーブについてから何も食べていません。でも、食欲より、強い睡魔が襲ってきました。気が付けば、有村さんに吹きこんでもらった iPhone 片手に眠りに落ちていました。

目が覚めたのは午前3時。時差ぼけのせいでしょう。でも、それからひたすらフランス語のスピーチの練習を繰り返しました。

他のメンバーとの合流は午前7時。歩いて10分ほどの距離にあるホテルです。つくる会岡野副会長やなでしこアクションの山本さんのお顔を見てホッとしました。

その後、全員で国連に移動。国連へは乗り換えなしで、トラム（路面電車）で10分程度です。結局滞在中はこの「15番」のトラムで国連とホテルを往復するだけ。まったく観光もできませんでした。

■ フランス語のスピーチ内容

プレセッションでのスピーチは、いきなり初日の11時30分からとなっています。国連に入る手続きにかなり時間がかかりました。（受付の欧米の担当者は並んでいる列が長くなろうが関係

なく、マイペースで仕事をされます。）このため、準備の時間が短くなってしまいました。

我々はプレセッションとは別に、国連の建物内で会議室を借り、「ジャパノロジー」と称して、日本文化を海外に発表する場を設けていました。そちらの準備が終わらないうちにいよいよ、女子差別撤廃委員会のプレセッションが始まる時間が近づき、我々は指定の会議室に移動しました。

プレセッションでは、動画、写真などの撮影は一切禁止。報道機関の記者も入ることができません。

この時間帯は、「日本を対象としたセッション」なので、委員は7名。公正を期すため、日本人の委員は除外されています。参加しているNGOは日本のみ。日弁連、日本女性差別撤廃条約NGOといった団体です。私達以外の団体は常連のようで、配分時間は各団体5〜6分と長め。私となでしこアクションの山本さんは前述のとおりそれぞれ2分ずつ。事前に全部の団体を平等にしてほしいとお願ひしたそうですが、認められなかったそうです。実績のない新入りなので仕方ないようでした。

短い時間だったので、「慰安婦の強制連行はなかった」ということに的を絞ってスピーチしました。フランス語、なんとかできました。以下が私のスピーチの内容です。

● 杉田水脈発言（使用言語はフランス語）

《私の名前は杉田水脈です。日本の前衆議院議員です。

今日は、私が考える慰安婦問題のポイントを皆さんと共有したいと思います。

日本の慰安婦問題の論点は、日本の軍隊が女性たちを強制的に慰安所に連行したかどうかです。

私は、外国で言われているような「日本の軍隊が力づくで女性たちを動員し、性奴隷にした」という歴史的な証拠は日本でいくら探しても見つからないことをここで確認しておきます。

「女性たちを駆り出して連行した」という話は吉田清治という作家のでっち上げが基となっています。

日本の有力紙、世界的にも有名な朝日新聞はこの作り話を歴史的な証拠として32年間の長きに渡り、国際的に日本の名誉を貶める報道を続けました。

しかしながら2014年8月5日、朝日新聞が紙上で慰安婦問題のこれまでの報道の検証を行い、吉田の証言が全くの虚偽であったことを認め、それを記事として周知しました。

しかし、現在、まだまだ世界中で、日本は女性を性奴隷にしたと思われるしており、それはナチスドイツのホロコーストに匹敵する重大な犯罪だと宣伝されています。

これは全く事実無根であることを私は大きな声で断言します。》

■ 山本優美子さんのスピーチ

委員の方から我々に対し、「世界のメディアで知らされていたのとは反対の意見を初めて聞いた。本当なのか。その根拠を知りたい」という発言がありました。

委員の方は明らかに混乱されていたようです。これまで、何十年間も「日本は慰安婦にひどいことをした」という見解を日本のNGOから聞かされていたのに対し、180度違う見解を我々が話したからです。でも、この委員の質問が、日本政府への質問につながりました。

山本優美子さんは英語で2分間スピーチしました。次が山本さんのスピーチ内容です。

● 山本優美子発言（使用言語は英語）

現在論争となっている慰安婦について、多くの日本女性の考えていることを本日述べさせていただきます。日本の戦争関係の請求・賠償は国際条約で解決済みです。それにも関わらず、未だに人権関連委員会の多くは日本に謝罪と賠償を求めています。これが、日本の名誉を傷つける政治的キャンペーンに繋がり、日本人に対する人権侵害が起っています。例を挙げると、米国では、慰安婦

像や記念碑が立ち、そこには「慰安婦は、日本軍に拉致され性奴隷にされた20万の女性少女である」と刻まれています。こういった場所は反日活動の拠点となり、日本人の子供達のいじめにつながり、地域の調和と平和に影響が出ています。米国、カナダ、豪州では、現地の日本人が強く反対しているのにも関わらず、更なる慰安婦像が計画されています。今現在、慰安婦問題は、女性の人権問題としてではなく、海外の日本人を非難する政治的キャンペーンとして利用されています。少女人身売買、貧困による強制売春、テロリストによる性奴隷など、もっと深刻な人権侵害が沢山あります。私達日本女性には、皆さんに検証された事実に基づいて慰安婦問題を見ていただきたい。そうして、これからは、現在起こっている女性の人権侵害問題の解決に向けて努力すべきだと考えます。》

■アメリカと似ているヨーロッパの世論

その日の午後は「ジャパノロジー」というイベントで、トニー・マラーノさんと女子大生の水田安美さんが発言されました。水田さんの発言内容は後にネットなどで話題になりましたが、「日本に生まれたことを誇りに思おう」という、若者を代表した素晴らしい意見でした。

午後の国連日程を終え、また19時から、翌日の市内のホテル（フラトンホテル）での講演会の打ち合わせです。この講演会是有村さくらさんがジュネーブの新聞（10紙近く）に公告を掲載し、市民の方に参加を呼び掛けてくださったものです。空腹と睡魔に耐えながらの打ち合わせは22時過ぎまで続きました。

その後、スイスで有名なチーズフォンデュのレストランで先に食事をしていた方々と合流。おいしいトマトチーズフォンデュをいただきました。

翌28日は朝8時に集合し、国連へ。ジャパノロジーの会議室では、午前中、全員参加でパネルディスカッションを行いました。実はこの間も夜の講演会に向けて、原稿の手直し、お昼休みは英語の練習と、気を抜く暇がありません。

ジャパノロジー午後のセッションでは、10分間英語でスピーチを行いました。時間があるので、「①20万人の少女が、②日本の軍隊によって強制連行され、③性奴隷にされた」という、韓国が主張している3つの嘘と河野談話の成り立ちについて話をしました。中国のメディアが来ていましたが、観客は少な目。なので、夜のリハーサルのもりでリラックスして話せました。

夜の講演会は、とても充実した内容でした。司会是有村さくらさん。発表者は、トニー・マラーノ氏、藤木俊一氏、山本優美子氏、藤井実彦氏、そして私です。参加者が少なかったのは残念ですが、それでも去年よりは多かったそうです。

私の英語スピーチは散々で、ひたすら自己嫌悪でした。が、会場からは、「アメリカにそんなにたくさんのお慰安婦像が建てられているのに、どうして日本政府は黙っているのか？」という質問がありました。

「日本政府は『歴史問題を外交問題化しない』というのが、ポリシーだから」と、回答しました。私が国会の質疑を行った時に外務省から返ってきた答弁と同じ答えをしながら、やはり悔しかったです。

私は有村さんに、ヨーロッパに何故中韓の主張は受け入れられているのか質問してみました。「ヨーロッパの世論はアメリカと似ている。アメリカの有力紙に中韓の主張ばかり書かれていることが原因である。ヨーロッパ人もニューヨークタイムズとかワシントンポストの記事を目にする人が多いし、まさかそれが中韓の主張とは思っていない」とのことでした。完全に情報戦に負けています。

講演会には、国連での発表を取材してくださった産経新聞ロンドン支局の記者さんの他に読売新聞ジュネーブ支局長さんもうらっしゃっていました。が、結局記事になったのは産経新聞だけでした。

終了後はみんなで晩御飯。タワーのような容器に入ってビールが出てきましたが、スイスのビールは冷えてないのが残念でした。

■ジュネーブで万葉集講座を受講

いよいよ国連での活動最終日となりました。午前中は前日と同様、慰安婦問題についてのパネルディスカッションに参加。

午後は万葉集講座「古代日本女性の社会進出と知的財産」を拝聴しました。

女子差別撤廃委員会。日本はまだまだ男尊女卑の国で女性の地位が低いという欧米の価値観の押し付け。

日本は古来より、女性が政治や文化そして一般生活においても高い地位にあり、活躍してきました。紫式部や清少納言は世界一古い女流作家です。万葉集にも女性の歌が多く記されています。こんな国は世界中探してもありません。

私の「水脈」という名前は万葉集から取っています。ジュネーブで万葉集講座を受講できるなんて、とてもご縁を感じました。

会場を片付けて、打ち上げへ。

ホテル近くのイタリアアンレストランでの打ち上げとなりました。この後、岡野先生、山本さん、藤木さん、藤井さん、そしてトニーさんはパリのユネスコに向けて出発されました。

7月30日。すべての日程を終え、帰国の途に就きました。

■政府・外務省への説明に奔走

我々が帰国した7月30日。女子差別撤廃委員会は早くもプレセッションのまとめを行い、日本政府に対し、質問書 (List of issue) を提出しました。今回その中に今までになかった新たな質問が加わりました。

《委員会は最近の公式声明から「慰安婦の強制連行を証明するものはなかった」との報告を受けた。これについて (日本政府の) 見解を述べよ。》

プレセッションでの我々の発言が影響したのは明らかです。この質問に対し、日本政府は翌年 (2016年) 2月に行われる本セッションに向けて回答を用意しなければなりません。

日本政府が「慰安婦の強制連行を証明するものはなかった」と回答すれば、世界中に誤った認識が広がっているこの問題にストップをかけることができます。

第1次安倍内閣においては、「慰安婦の強制連行を示す証拠はなかった」と閣議決定をしています。また、安倍首相は戦後70年談話の中で「私たちの子供や孫、そしてその先の世代の子供たちに、謝罪を続ける宿命を負わせてはなりません」と述べました。

しかし、これまでの日本政府の報告書を見ると、

- ・政府は機会あるごとに慰安婦の方々へ心からのお詫びと反省の気持ちを表明してきた。
- ・アジア女性基金 (AWF) を設立し、一人当たり200万円の償い金をお渡ししている。
- ・歴代首相は政府を代表して、直筆の付した謝罪と反省を表明した手紙をそれぞれの元慰安婦に直接送っている。

といった内容に終始しています。

また、報告書作成時に男女共同参画会議監視専門調査会による監視というのを受けるのですが、この調査会が行う有識者ヒアリングでは、国連の女子差別撤廃委員会に出席していたNGOから何人が招かれています。

このようなことを勘案すると、毅然と強制連行を否定する見解を発表することは簡単ではないようです。

そこで我々は、政府の要人を訪ね、今回の国連女子差別撤廃委員会での意見発表、その後の委員会からの質問書について説明しました。限られた時間でしたが、この件についてご理解いただき、委員会に対する最終見解は外務省ではなく、政府が責任を持って作成するとのお約束をいただきました。

その後、官邸を通してご紹介いただいた外務省の担当者の方にも直接説明に伺いました。こ

ちらは「趣旨は理解したが、我々は多方面の方々の意見を聞かなければならない」という想定通りの回答しかいただけませんでした。

■人権理事会での悪戦苦闘

9月8日、都内で国連報告会が行われました。その席で、国連人権理事会で発言する翁長雄志沖縄県知事のカウンターとして、沖縄の真実を訴えるためにジュネーブを目指す方々の決意表明がありました。

この訪問団とは別に、人権理事会で慰安婦問題を訴えるため、私も別日程で国連に行くことが決定しました。この時点では、私が9月末に一人でジュネーブに行き、発言する予定となっていました。

その後は人権理事会に参加するメンバーでメーリングリストを作成し、情報のやり取りを行いました。が、出発の時期を迎えても段取りをする事になっていて、NGOから詳細が示されず、かなり不安が募りました。

そんな中、韓国挺身隊問題対策協議会(以下、挺対協)が、90歳の元慰安婦と共に18泊19日でヨーロッパを廻り、慰安婦問題を訴える、月末はジュネーブの国連に来ることも予想されるという

ニュースが入りました。このことをメーリングリストに挙げたところ、テキサス親父事務局の藤木氏が「用心棒」をかねて、一緒に行ってくださいることになりました。

9月28日。飛行機のトラブルもあり、予定より3時間遅れてジュネーブに到着。翌朝、さっそく国連に行き、私の発言がどのアイテム(時間割に設定されているテーマ)で発言することになっているのか確認しました。

私が割り当てられていたのはスリランカの人権問題を議論するアイテムでした。(ちなみに翁長知事や我々の沖縄訪問団が発言したのは「少数民族」がテーマのアイテムでした。)枠を取ってくれたNGOの責任者からは「スリランカは貧しい国なので、そんなにたくさん発表者が来られない。きつと時間が余るからその時間で発表すればいい」、「事務局に提出した内容と違うことを話しても大丈夫だから、うまくやれば慰安婦問題について発言できるはず」という内容の説明を受けていました。

「本当にこのアイテムで慰安婦問題について発言してもいいのか?」、「関係ない国のアイテムで発言するのはいかなものか」と半信半疑で、日本から用意してきた原稿を事務局に提出。

案の定、「この内容はここでは発言できません。」という回答が返ってきました。

万事休す。今回は発言できない。何しにここまで来たのだろう。虚無感が襲います。

日本の支援者の皆さんにも連絡し、状況を説明しました。後の日程をどう過ごすか? そ

んなことを考え始めた時に、あることが閃きました。

「クマラスワミ報告書のクマラスワミさんって、スリランカ人ですよね？」

河野談話の検証や朝日新聞の訂正記事を踏まえて、日本政府は昨年、クマラスワミ氏に報告書の訂正を求めましたが、彼女はそれに応じていません。そのことを発言するのはどうだろうか？

そこからホテルに戻り、日本語で一から原稿を書きました。それを藤木さんと前回もお手伝いいただいた現地在住の有村さくらさんが英語に訳します。発言時間は前回と同じ2分。英語の原稿をこの2分以内にまとめるのに時間を要し、発表原稿が出来上がったのは夜中の2時を回った頃でした。

翌朝、書き上げた原稿を事務局に提出。「この内容ならOK」と、すんなり受け取っていただきました。

ここからは英語との戦い。前述の二人から厳しい特訓を受けました。本来30日の午後3時からのアイテムでの発言が予定されていましたが、前のディスカッションが伸びたようで、翌日の午前10時からのセッションに持ち越されました。その日の夜は食事の時間もそこにスピーチのレッスンが続きました。

翌朝、会場に発表者が張り出されます。私の順番は53人目でした。順番が回ってくるまで原

稿の最終チェック。緊張しながら出番を待ちました。

午前11時40分。自分の順番となりました。私が話し始めた途端、会場の空気が少し変わったのを感じました。何やらざわざわし始めたのです。そのざわざわの原因は何かわかりません。「なんて話をしているのだ？」「なぜここでそんな話をしているのだ？」そういう意味だったのかもしれない。

■ 発言全文

ここに、発言内容を紹介いたします。

《Thank you very much Madam Vice President.

副議長、有難う御座います。

UN Human Rights Commission Report on Comfort Women issue, commonly called «Coomaraswamy Report», declares Comfort Women as «sex slaves».

国連人権理事会における、いわゆるクマラスワミ報告書に「慰安婦は性奴隷だ」と宣言されています。

The conclusion of this report is based on two sources: first, the testimonies of former Comfort Women; second, the confession of Seiji Yoshida on his involvement in forced mobilization of Korean women.

この報告書は、主に2つの情報源により結論づけられました。

1つ目は、元慰安婦達の証言、2つ目は、慰安婦の強制動員に関わったとする吉田清治の証言です。

However, both of these sources have been discredited and disproved.

しかしながら、双方共に反証され論拠を失いました。

Several former comfort women confessed to Professor An Byong-jik of Seoul University and Professor Sarah Soh of San Francisco State University that they told a lie to the Sri Lankan UN Special Rapporteur, Ms. Coomaraswamy.

何人もの元慰安婦達が、ソウル大学のアン・ビョン・ジック教授やサンフランシスコ州立大学のサラ・ソウ教授に対して、国連のクマラスワミ特別調査官に虚偽の証言をしたと証言している。

Chong Dae Hyup, an organization under North Korean influence, confined these women in a house and trained them to confess that they were abducted by Japanese Army.

北朝鮮の影響を受けている挺身隊対策協議会は、これらの慰安婦達を(ナムムの)家に軟禁し、日本軍に誘拐されたと告白する様に訓練しました。

Second source of Ms Coomaraswamy's conclusion is Mr. Yoshida's book, "My War Crime". Mr Yoshida admitted that he fabricated the story in an effort to sell more books.

クワラスワミ女史の結論づけの2つ目の論拠は、吉田清治の本『私の戦争犯罪』で、後に吉田氏は、たくさん売るために捏造した事を認めています。

However, it had been diffused as a historical fact by Asahi Newspaper for 27 years. However, Asahi admitted last

August that its articles were false, withdrew them and published an official apology.

しかしながら、それらは、朝日新聞などにより事実として、32年間拡散されました。

しかし、朝日新聞は昨年8月にそれらの記事は間違っていた事を認めて、撤回する記事を出し、謝罪しました。

The Japanese government has adopted a Cabinet decision affirming "no evidence of forcible mobilization of Comfort Women was found."

日本政府は、「慰安婦が強制動員された証拠がない」事を閣議決定しました。

Moreover, the US Army Report No.49 issued in 1944 clearly states that "Comfort Women

were well paid prostitutes" indicating they were not "sex slaves" deprived of freedom.

更に米陸軍が1944年に作成した報告書には「慰安婦達は高給取りの売春婦」だと書かれており、自由を束縛された「性奴隷」では無い事が記されています。

Based on the UN report, Koreans and Chinese have been placing Comfort women statues and monument in several nations.

朝鮮人達や支那人達は、国連の報告書などを根拠に外国に慰安婦像や碑を建てています。

In those cities, many incidences of bullying of Japanese children have been reported. Such human rights violation should not be overlooked.

それらの街では、日本人の子供達へのイジメが報告されています。このような人権侵害を見過す訳にはいきません。

We would like you to withdraw the "Coomaraswamy report" then consider the human rights of those who have been victimized by this political propaganda campaign.

我々は、「クマラスワミ報告書を撤回し、政治運動により被害を受けている被害者達の人権を考慮していただきたい。

Madam Vice President, we urge the United Nations and Sri Lankan government to conduct a further investigation based on documented historical evidence without preconceived bias.

副議長、我々は、国連とスリランカ政府に対し、先入観を排除し、史実に基づいた更なる調査を促します。

We are prepared to cooperate with your investigations.

我々は、貴方がたの調査に協力する準備があります。

I thank you very much.

有難う御座いました。》

■ 確実な反響と新たな展開

発言が終わり、地下のカフェでコーヒーを飲んでいる我々に一人の記者が話しかけてきました。

「スピーチ、聞きました。もう少し詳しくこの問題について教えてほしい。」

彼はパキスタン人で、国連に詰めている記者さんでした。「中国は嫌い」と笑顔で語る彼といくつかやり取りをし、名刺を交換して別れました。

後日、彼から事務所に電話とメールで連絡がありました。

「記事にしたいので、原稿を送ってほしい。それからクマラスワミ報告書について知りたい。」

という内容でした。私は発言した原稿とクマラスワミ報告書についてのURLを彼に送りしました。

彼は、「ボラン・タイムズ・インターナショナル」という海外メディアでこのことを取り上げてくださいました。

<http://www.bolantimes.com/urge-for-further-investigate-for-coomaraswamy-report/>

また、彼からテキサス親父事務局の藤木氏に連絡があり、新たな展開が生まれました。

「記事はとても好評でとてもたくさんの方のアクセスがある。特にアメリカと韓国からのアクセスが多い。反応を見ていて、あなた方が主張していることが真実であると確信した。来年3月、国連で各国の記者を集めてシンポジウムを開くので、この話をしに来ないか？」

我々は真実を訴えています。筋を通していけばこういった新たな道が拓けます。これからもブレずにこの問題に取り組んでいきたいと思っています。

第五章

日本国外務省に20年遅れの「罪状否認」をさせる



ジュネーブ国連ビル前での代表团一行
(2016年2月)。

第3次派遣・ジュネーブ国連代表团

(2016.7)